二〇二五年度 一般選抜入試A日程 全学部統一
学部学科特色型・英語外部試験利用型（2月4日）

国語

1

出典 廣田龍平『〈怪奇的で不思議なもの〉の人類学――妖怪研究の存在論的転回』（青土社）

解答

問一 (1)―エ (2)―オ (3)―ウ

問二 エ

問三 エ

問四 オ

問五 イ

問六 エ・カ

問七 (V)―ウ (W)―イ (Y)―イ

問八 ウ

問九 オ

問十 エ

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

解説

問二　何を「慎重に判断」するのかを、直前の内容からつかむ。妖怪や動物が「人間の姿で現れていても、言語の運用能力に部分的な不完全さがあ」り、その「不完全さ」を「慎重に判断できれば、相手に化かされることはない」ということである。その「不完全さ」の説明として、こちらから挨拶をして相手がどのように答えるかについての日本各地での具体例が挙げられている。この内容を受けて「挨拶の応答に不完全な点」とまとめたエが最適。

問三　傍線部(b)の直前にある「このプロセス」の指示内容を的確に捉える。同段落前半の内容を簡潔にまとめると、〈「会話やコミュニケーションが可能」な場合、その相手は「『私』と同等の存在論的身分」をもつものとなり、この前提において、相手が「死者あるいは動物」であるならば「私」は相手と同じ「死者あるいは動物」ということになる〉となる。以上の内容をまとめたエが最適。

問四　傍線部(c)を含む段落の第二文で、「引用部分の後半でのヴィラサの指摘」が「日本の古典的な黄泉戸喫」すなわち「女神イザナミ」の話にも該当すると述べている。「ヴィラサの指摘」とは〈ヒトである自分が動物・精霊・死者の同類に変わってしまう〉という指摘。つまり、「女神イザナミ」は黄泉の国に行って死者の同類に変わったため、生者からは「醜悪な死体」としか見えない身体も、その国の住人からは普通の美しい身体に見える、というのである。この内容を捉えたオが最適。

問五　傍線部(d)を、語順を変え言葉を補って言い換えてみると、〈国家を持たなかった〔＝国家に属さない〕先住民にとっての「鬼である異人」は、国家の市民である近代的な私たちなのである〉となる。これはイの二文目と同じ内容。傍線部(d)の前の「警察に呼び止められるとき……逃れることができる」の部分は、イの「国家権力による……宣言せざるを得なくなる」に相当。さらに本文には、「(その宣言によって)国家のなかの市民となってしまう――客体化されてしまう」とある。これは、イの「『私』という主体を奪われる」に相当。

問六　ア、第一段落には、「相手の顔がよく見えない黄昏時……挨拶をして誰か確かめていた」とある。顔が見えなくて

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

誰かわからないから挨拶をして確かめるのである。「相手が異人であるかどうかを確かめるため」は、初めから相手が異人かもしれないと疑っているという意味になる。また、「ボーッツァン」については「stranger を意味する語」とあるが、相手に挨拶する際の呼び掛けの言葉とは述べられていない。

イ、タバコの煙などでいぶすと元に戻るのは、「イウィアンチュという死者」ではなく、その死者の被害にあって昏倒するか言葉が話せなくなった「女性や子ども」のほうである。

ウ、「獣肉と称して……寝たりする」のは、「ワリの狩人」が目撃する「動物か精霊、あるいは死者」の異常行動。

エ、傍線部(c)の直後に「ヒトが超自然的になる状況」の例として述べられている。

オ、後半部分が波線部(Z)を含む段落に書かれた内容と合致しない。正しくは〈自分自身が「可視的身体を正当に帯びている主体であることを確立」できたから〉である。

カ、最終段落第一・二文の内容を言い換えたもの。

問八　波線部(U)の後に、「こうしたやりとりは……相手との社会関係を確立する機能を持っている」とある。この内容を捉えたウが最適。アは「海上で猫が……呼びかける」が不適。猫は「海上」にはいない。イは「(猫が) 振り向いた対象に自分を大きく見せ」、エは「距離感覚をおかしくさせる」、オは「その後ろに出現し」がそれぞれ不適。

問九　波線部(X)の例である引用部分の最後のほうに「一緒に食べた者は……自分たちが似た観点を共有しているという事実を確保する」とあるが、これは、中ほどにある「それら〔＝動物・精霊・死者〕の同類に変わってしまう」の言い換えである。この内容を捉えたオが最適。

問十　波線部(Z)の直前に「自分が人間であること、可視的身体を正当に帯びている主体であることを確立するため」とある。「『私は人間である』という宣言」は、すなわち「自分が主体を確立している人間であること」の宣言であり、そう宣言することで死者や動物から化かされないですむのである。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

②

出典 岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か――第三世界フェミニズムの思想』（青土社）

解答

問一 (1)―エ　(2)―イ

問二 エ

問三 ア

問四 オ

問五 ウ

問六 イ

問七 エ・オ

解説

問二 傍線部(a)中の「事実」については、次の段落に述べられている。「『第三世界』に対する差別的なまなざしに基づいた……野蛮なものとして表出するイメージ」が「『人権』や『フェミニズム』を標榜する言説のなかで拡大再生産されている」とある。このような「事実」が「喜ばしいこと」ではないのである。この内容を簡潔にまとめたエが最適。

問三 「悪貨が良貨を駆逐する」は〝同一の名目価値をもつ良貨〔＝金の含有量が多い貨幣〕と悪貨が同時に流通すると、良貨がしまい込まれ悪貨だけが使われる傾向になる〟というグレシャムの法則。そこから転じて〝悪いものが良いものを圧倒するさま〟に用いられる。アはこの言葉の解釈が的確。また、アの「彼女たちを差別される他者とする認識」は、第二段落後半の「七世紀の掟に縛られる……アフリカ女性といったステレオタイプ」をまとめたもの。さらに、第三段落第二・三文にも「差別的な他者像を再生産」「他者をそのようなものとして……一方的に規定する」とある。

問四 傍線部(c)の後に「西洋は私たちに……」というナワール・エル＝サアダーウィーの言葉が挙げられているが、ここ

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

からオにあるように「アラブ社会やアフリカ社会など」が「西洋から人権を教えられる側とされ」てきたということが読み取れる。また、オの二文目は第三段落第三文「そして、他者を……一方的に規定する」の部分に相当する。

問五　傍線部(d)内の「問題の本質」とは、どのようなことを指しているのかを把握する。前段落において、「アラブ女性が、あるいはムスリム女性が……西洋である」という考え方を挙げ、そこには「異論の余地なき『普遍的人権』」が担保されていると批判する。これがここでの「問題の本質」である。さらに、傍線部(d)の主語（主部）は「『フェミニズム』対『イスラーム』……二分法……による議論」の部分だが、その後でそれを「このようなパラダイムで議論するということ」と言い換え、そこには「一方的かつ恣意的に他者を表象する権利に対する承認こそが、秘かにもくろまれている」と述べている。以上の内容をまとめたウが最適。

問六　傍線部(e)内の「この問い」の具体的内容を把握する。傍線部(e)を含む最終段落冒頭に「彼ら」は「あなたはどちらの立場をとるのですか」と「執拗に問うてくる」とある。「どちら」とはその前段落にある「『普遍的人権主義』対『文化相対主義』といった粗雑で安直な二分法」のうちのどちら、ということである。さらに、その問いに答えてはいけない理由として、傍線部(e)の直前に「だれが他者を表象する言説の主体となるべきかについての（西洋が一方的に規定した）前提を承認してしまったことになるから」とある。以上の内容をまとめたイが最適。

問七　ア、「掟」は第二段落、「普遍的人権」は最後の三段落に登場する語句だが、この二つを結びつけて「ムスリム女性などを『掟』に縛られていると捉えることで『普遍的人権』を理解できる」とする記述はない。

イ、「内面化される」きっかけの捉え方が誤り。第三段落には、「抑圧的なアラブ社会……因習の犠牲者アフリカ女性等々」と「一方的に規定すること」が「ナルシスティックな自己像」を「内面化させ」、と述べられている。「非人道的な因習の存在を受け入れ」ることが内面化させるわけではない。

ウ、第五段落に引用されているエティエンヌとリーコックの言葉に「平等主義的な関係、あるいは、少なくとも相互に尊重しあうような関係は、前植民地時代の世界の多くで生きた現実」とあることと合致しない。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

エ、第六段落に「『西洋フェミニズム』は、抑圧される女性の主体性の回復をつねに問題にし」ているとある。さらに傍線部(c)を含む段落において、その「西洋フェミニズム」の言説が女性を抑圧する社会だとして「第三世界」を批判する際の根拠は「『人権』や『フェミニズム』の普遍性」であると述べ、それらは「西洋が他者〔＝第三世界の女性たち〕を（被）抑圧的なものとして一方的に規定するという行為」だと批判している。エは、これらの内容をまとめたもの。

オ、傍線部(d)を含む段落の内容に合致する。西洋の立場は「普遍的人権主義」＝「普遍的人権を信じそれを実践すること」であり、その対極にあるとされる「文化相対主義」＝「自文化の伝統に主体的に参与すること」とは相互に排他的、両立不可能であるというのが、西洋が「一方的に規定したパラダイム」だと述べる。「パラダイム」とは〝特定の時代や分野における物の見方や捉え方〟のことで、オでは「システム」と言い換えられている。その「パラダイムを無条件に前提とする」ということは、「そこで行使されている権力を無条件に承認するということ」である。オは、これらの内容をまとめたもの。

カ、最終段落に「問題なのは、『普遍的人権主義』か『文化相対主義』か、なのでは、ない」とある。「文化相対主義」を否定すべきだとは述べられていない。

③

出典 紫式部『源氏物語』〈若菜　上〉

解答

問一 オ

問二 ア

問三 ウ

問四 (c)―エ　(e)―イ

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

問五　イ
問六　オ
問七　エ
問八　(一)1―イ　2―カ　3―イ　(二)1―エ　2―オ　3―ア
問九　(W)―イ　(Y)―ア
問十　ウ
問十一　ア

解説

問一　二重傍線部(1)は尊敬の補助動詞。尊敬語は動作主に対する敬意を表す。前書きに「女宮のもとに……女君が出かけて対面をしようとしている場面」とあることから、「出で立ちなどしたまふ」の動作主は「女君」であることがわかる。(2)は謙譲の補助動詞。謙譲語は動作の相手に対する敬意を表す。（注）の記述から、「我より上の人やは……こそあらめ」は女君の心中文であることがわかる。よって、動作の相手は「女君」ではなく「院」と考える。「見えおきたてまつり」は（注）にあるような頼りない身の上を、若い頃に院に見られ申し上げていた、ということである。(3)は尊敬の補助動詞。「年ごろ目馴れたまへる人」は〝長年（院が）見慣れていらっしゃる人〔＝女君〕〟の意。動作主は「院」。(4)は尊敬の補助動詞。ここは、院が女君の部屋に来て、彼女が手習いで書いた「身にちかく…」の和歌を見つける場面。「書き」の動作主は「女君」。

問二　「やは」は反語なので、「やはあるべき」の訳は〝いるだろうか、いや、いない〟となる。「我より上の人」は文字通り〝自分より上の人〟、つまり〝自分より勝る人〟である。イやウの「私以外に」という訳にはならない。

問三　直前の「手習などするにも……思ふことありけり」の内容を正確につかむ。「おのづから」は〝自然に、ひとりで〟の意。「書かるる」の「るる」は自発。つまり、手習いで古歌を書く際にも、無意識に物思いを詠んだ歌を選ん

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

でしまうというのである。そんな自分に「さらばわが身には思ふことありけり」と気づかされるのである。ここの「思ふ」は〝思い悩む、嘆く〟の意。「けり」は、今まで気づかなかった事実に気づいて述べる意を表す。

問四　傍線部(c)の「うつくし」は、肉親や小さい物、幼い者に対する愛着を表す。(e)の「恥づかしげなり」は形容詞「恥づかし」に接尾語がついて形容動詞になったもの。こちらが気後れするほど相手が立派だという意味を表す。

問五　問一で捉えたように、ここは院が女君の部屋にやって来た場面で、「年ごろ目馴れたまへる人」は女君を指す。院は〈女君が世間並みの容姿であったなら、これほど驚きはしない。ということは、やはり女君は類いない人なのだ〉と思って女君を見ている。つまり、傍線部(d)の「ありがたし」は、めったにないほどの女君の美しさについて述べたもの。

問六　「いかで」は願望や意志を表す語句と呼応していないので、ここは〝どうして〟と訳す。「かく」は〝このように〟の意で、その前で言及している女君の美しさを指している。「けむ」は過去推量の助動詞で〝〜ただろう〟と訳す。

問七　傍線部(g)は、女君が手習いで書いた「身にちかく…」という歌の横に院が書き添えた歌。「身にちかく…」の歌で、「秋」には「飽き」が掛けられ、「青葉の山」は院の愛情を暗示し、〈院は自分に飽きて別の女性に愛情が移ってしまった〉という思いが込められている。それに対する歌ということを考えれば、「水鳥の青羽」は「青葉の山」に対応する表現で、院の気持ちを表すと捉えられる。「萩のした」の「した（下）」は〝下葉〟の意で、外からは見えない（女君の）心の意を暗示する。「ことなれ」は形容動詞「異なり」の已然形。

問八　(一)　下に、連用形接続の尊敬の補助動詞「たまふ」が接続しているので、サ行変格活用「す」の連用形。

(二)　下に、未然形接続の打消の接続助詞「で」が接続しているので、ヤ行下二段活用「見ゆ」の未然形。

問九　波線部(W)は、助動詞「べし」の連体形に接続し、直後に「あり」を伴うことから、断定の助動詞「なり」の連用形。(Y)は、ハ行四段活用の動詞「うつろふ」の連用形に接続し、「にけり」の形になっているので、完了の助動詞「ぬ」の連用形。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

問十　「来ぬらむ」の「ぬ」は完了（強意）の助動詞「ぬ」の終止形。打消の助動詞「ず」の連体形ではない。「らむ」は終止形（ラ変型活用語には連体形）接続の助動詞で、現在推量を表す。エは「らむ」を伝聞で訳しているので、不適。

問十一　直前の「ことに触れて……消ちたまへる」の内容を捉える。〈気の毒なご様子が自然に外に漏れ見えてしまうのだが、それを何でもないことのように隠している〉というのである。この場面で心を痛めているのは女君のほうなので、そんな女君のことを院が「ありがたくあはれに思」っているのだと捉える。

4

出典　『欧陽修全集』〈梅聖俞詩集序〉

解答

問一　(X)―イ　(Y)―ア　(Z)―ウ

問二　ウ

問三　イ

問四　ア

問五　エ

問六　イ

問七　ウ

解説

問二　傍線部(a)の後半の「不得～」は〝～することができない〟の意。梅聖俞は若くして官吏登用試験に推挙されたものの出世を阻まれ、五十歳になった今も下役に甘んじているというのである。そのような状況のため政治上の仕事に十分に力を発揮することができずにいる、と解釈したウが最適。

問三　ここは梅聖俞の神童ぶりを述べた部分。幼少時に詩を習い、子どものときから詩を作って長老を驚かせていたとい

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

うのである。「自」、「為」ともに複数の用法があるが、ここの「自」は助詞として用いられ「～より」と読む。〝～から〟の意。「為」は断定の助動詞として用いられ「～たリ」と読む。〝～である〟の意。

問四　「賢愚と無く」は〝賢者も愚者も関係なく〟の意。

問五　傍線部(d)の前に「聖兪亦……発レ之」とある。「之」は「不レ得レ志者」、すなわち〝才能があるのに思いどおりの出世ができないことに対する鬱々とした思い〟を指し、それを「発」するために「楽二於詩一」、すなわち詩を作って楽しんでいるというのである。

問六　ア、本文中で述べられていない内容。

イ、傍線部(c)の後に「語レ詩者、必求二之聖兪一」とある。これは、イの前半部分に合致。後半部分は、本文初めから傍線部(a)までの内容に合致する。

ウ、「文章」と「詩」が逆。梅聖兪の作る文章は「簡古純粋」ですばらしいが、世間の人が注目するのは彼の詩ばかりであると述べられている。

エ、この文章は梅聖兪について述べられたものであって、人生の送り方に関する一般論ではない。

問七　「未」は再読文字で、二回目の読み「ず」は「有」から返って読んでいるので「レ点」がつく。「上」から「薦」へは間に一字挟んで返るので「一・二点」を用いる。イは「一・二点」と「上・下点」の使い方が誤り。間に「一・二点」を挟んで返る場合に「上・下点」が用いられる。エは「一レ点」が用いられているが、これだと「者」→「上」→「薦」の順になってしまうので誤り。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。